

## 特集

## 福島からの手紙(3)

福島県男女共生センター館長 千葉 悅子さん



## プロフィール //

北海道大学院教育学研究科博士課程修了。福島大学行政社会学部講師、同教授、行政政策学類教授、同学類長、福島大学副学長を経て、福島大学名誉教授。現在は放送大学福島学習センター所長を兼務。専門分野はジェンダー学習論、地域づくり教育論、農民家族論。平成22年4月より現職

情報誌クレオでは、これまで2012年(平成24年)5月号と2016年(平成28年)1月号で、東日本大震災からの復興への活動と福島県男女共生センターの取組についてご紹介しました。今回、震災から8年経ち、前回の手紙での課題や取組のその後について、ご報告いただきます。

## 「8年後」の福島の姿

東日本大震災と原発事故から8年が経過した。

前回の手紙(2016年1月)以降、葛尾村、川内村、浪江町、川俣町、飯館村の「帰還困難区域」を除く避難指示区域が解除となり、2019年4月には福島第一原発の立地自治体である大熊町の一部が解除され、5月には役場が町内に戻り業務を再開する。ただ、解除はされたが多くの住民は戻っていない。帰還した住民の数は、飯館村が震災前の約20%、帰還困難区域を多く抱える浪江町と富岡町は約6%と約9%である。

福島県男女共生センターでは、2019年3月によく敷地内に埋設された除染土の撤去作業が始まった。除染土は大熊町と双葉町にある“中間”貯蔵施設に運搬される。国が『復興五輪』の準備を進める中、福島では、避難区域解除のほか、遅れている廃炉作業や除染土再利用の実証実験等のニュースが毎日流れている。

## 飯館村の佐野ハツノさん、渡邊とみ子さん

これまで2回の手紙でご紹介した佐野ハツノさんと渡邊とみ子さんのその後をお伝えしたい。

ハツノさんは、仮設住宅暮らしで元気を無くしてしまった女性たちとともに「カーネーションの会」を立ち上げ、全国から届けられた着物の古着をリフォームして「までい着」(“までい”とは飯館村の言葉で“丁寧に”等の意味)に仕立て、首都圏のデパート等で販売する活動をしていた。活動が軌道に乗り、帰還後の副収入・生きがいづくりとして継続を望んでいたが、帰還するメンバーが少なく、さらにハツノさんご自身が病に罹り、活動継続は断念した。ハツノさんは、育てられた村に戻って復興の一翼を担いたいと願っていたが、2017年8月に逝去された。さぞかし無念だったに違いない。ハツノさんは村の再生を強く望み、その思いを「子どもや孫、ひ孫等々にまで伝わるよう何百年も生き続けるケヤキを植えたい」と生前語っていた。今、ハツノさんの遺志を継ぐようにご自宅の周囲にはケヤキが植えられている。

とみ子さんは、飯館村、葛尾村、浪江町から避難してきた農家の“かあちゃん”たちと“かーちゃん”的プロジェクト協議会(以下、「かーipro」)を立ち上げ、凍(し)み餅や凍み豆腐などの故郷の食文化を活かした手料理、漬け物、お菓子等の加工・販売や、健康に配慮したお弁当づくり等で経済的自立をめざした。しかし、行政等からの支援は3年で打ち切られ、また収益増をめざしたい人と社会的なつながりを求めることが第一と考える人との意見の

隔たりや、無理が重なって途中で辞めていくメンバーも現れた。

とみ子さんは弁当事業の縮小や市内店舗の閉店等、事業縮小を図りつつ、食を通じた生きがいづくりに原点回帰して活動を続けたが、避難指示解除を機に「かーipro」を解散した。帰還する人、避難先に留まる人、解除後の選択はメンバー各々違っており、活動の継続は困難だと判断したからだ。しかし、これで終わったわけではない。「かーipro」の元メンバーは各自自立して活動を再開している。とみ子さんは避難先の福島市内と帰還先の飯館村で、飯館村オリジナル品種のカボチャ「いいたて雪つ娘」を生産・加工し、大手スーパーで販売を続けるかたわら、語り部の活動・体験ツアー、あぶくま食の遺産継承等の活動も精力的に続けている。

※渡邊とみ子さんの著書「いいたて雪つ娘」ものがたり(自費出版)は下記でお買い求めいただけます。

福島飯館 までい工房 美彩恋人 <http://madeikoubou.thebase.in/>

※いいたてWING19の著書「飯館の女性たち」(SEEDS出版)は佐野ハツノさんら「若妻の翼」のメンバー1人1人のライフヒストリーをまとめています。

## 復興とまちづくりの現場で活躍する女性

福島駅前広場で県内の農家と消費者が会話を楽しみながら買い物できるマルシェ「Good Day Market」を毎週日曜日に開いている「一般社団法人GDMふくしま」の佐藤宏美さんを紹介したい。宏美さんは、地元福島の大学を卒業後、京都の日本料理店で役員秘書をしていた時に東日本大震災が起きた。福島の食材に誇りをもっていた宏美さんは、福島の食や農業はこんなことでは負けないことを証明したいと福島に戻り、復興コーディネーターの仕事をしながら、福島の農家を応援しようと、休日に福島市内の農家と野菜を売る活動を始めた。2018年1月、その活動で知り合った復興や福島のまちづくりに携わる人たちとネットワークを広げ、農産物販売を本格的に取り組む「GDMふくしま」を立ち上げた。

2019年3月から、宏美さんたちは、築80年の木造平屋「如春荘」を清掃・手入れし、新たな交流の拠点とした。「如春荘」では宏美さんの取組に賛同する地元のカフェ経営者等の協力を得てさらに活動の幅を広げている。

避難解除という新たな段階を迎え、活動に終止符を打たざるを得ないところもある。しかし、宏美さんのようなターンやリターンの頼もしい女性たちによる被災地から発信する活動が各地で確認できることもまた知ってほしい。



佐藤宏美さん



渡邊とみ子さん

## 全国の男女共同参画センターとの連携

全国のセンターを通じて、多くの方々に福島の取組と姿を発信し続けることは私たちの大きな役割であると思っている。当センターでは昨年、被災地の富岡町をフィールドとして、避難先と帰還先でのコミュニティづくりの課題と解決方法を模索するセミナーを行った。若い世代の地域おこし協力隊メンバー等が参加し、帰還・避難先での生活に揺れる町民の意見に触れ、コミュニティづくりの難しさを改めて知った。セミナーの詳細は、当センターホームページや広報誌「未来館NEWS」70号をご覧いただきたい。

<http://www.f-miraikan.or.jp/magazine/pdf/news70.pdf>

8年経過した現在でも3万人以上の県民が全国に避難している。全国の男女共同参画センターの皆さんには、被災して間もない頃からずっと、交流の場等、被災者を勇気づける活動をしていただいている。また、クレオ大阪の皆さんには、この手紙だけではなく事業連携等、いつも福島のことを気にかけていただいている。この紙面を借りて感謝を申し上げ、今後とも、引き続き連携を深めさせていただきたく、よろしくお願いしたい。

執筆者の千葉さんには、6月23日(日)にクレオ大阪中央にて『福島の女性たちのいま～復興に向けたリーダーシップ～』セミナーにご登壇いただきます。ぜひご参加ください。(詳細は13ページ)